

中学校美術科におけるデッサン教育の位置付け

長橋 秀樹

要旨：美術教育は一般的に他領域教科との比較の中で、情操教育や感性涵養教育が一義的教育内容として認識され、実社会への直接的還元力の涵養に結びつきにくい教科という印象を受けている。ましてやデッサン教育という言葉を聞けば、益々芸術の専門性の中で展開される領域の出来事と位置付けられてしまう。しかし、前述で挙げている情操教育や感性涵養教育を踏まえてデッサン教育は主題を基に一つの世界観（考え方）を具現化する力を涵養するもので、現在の教育界であらためて認識を深めようとしている三つの能力 1. 〈学びに向かう力・人間性の涵養〉 2. 〈生きて働く知識・技能〉 3. 〈未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力〉の育成が見事にデッサン教育（基礎教育）に組み込まれていることを再認識することになる。

キーワード：基礎力、判断力、想像力

It places sketch education in the junior high school art department.

はじめに

平成 30 年中学校学習指導要領改訂へ向け、文科省からすでにいくつかの試案が提示されている。そこには各教科において教育課程の中で“どのように学ぶか”，学習評価として“何が身に付いたか”という問いへの回答を求める文科省の明確に打ち出した態度が反映されている。さらにその中には基礎教育の重要性を説く内容も盛り込まれている。

これまでの教育要領の改訂を振り返ってみると、平成元年に採用された新学力観という概念。その後、生徒の授業に対する主体性を鑑み、平成 3 年（1991）指導要録改訂の中で「関心・意欲・態度」を授業評価の第一項目とした。その目的は生徒の授業に対する内面的評価を推し量るものであり、その影響下で美術科では「創造的な技能」が第三項目になる（第二項目は「発想や構想の能力」）。さらに結果（作品）よりもプロセス重視という学習態度への認識が波及していく。平成 10 年に「生きる力」が学習指導要領で告示され総合的学習の時代に突入する。

確かに複雑化する近未来の実社会へ参入する生徒たちへ、多様な価値観を備えた人物像を投影することは理解できる。しかしこのようなプロセス主義に傾斜する弊害として極端な専門性の軽視が懸念される。このような流れを鑑み、文科省は今回の改訂（平成 30 年）で軌道修正を図っていると思われる。本稿は現行の平成 20 年改訂版学習指導要領中学校美術科の記述内容を再考する中で主にデッサン教育に関わる内容に

ついて考察していく。

研究方法

平成 20 年改訂版学習指導要領中学校美術科【第 2 章 美術科の目標及び内容】〈第 2 節美術科の内容〉〈共通事項〉・【第 3 章 各学年の目標及び内容】〈第 1 節 第 1 学年の目標と内容〉の記述内容の基礎教育〔主にデッサン教育〕に言及している箇所をピックアップし、その内容を再認識するとともに著者の解説を加えていく。尚、平成 20 年度改訂学習指導要領中学校美術科原文は明朝体（太字）で表記し、著者の解説箇所は明朝体で表記している。

※抽出した記述には項数を付記 ※文中の下線は筆者が付記

平成 20 年度改訂 学習指導要領中学校美術科

第 2 章 美術科の目標及び内容

美術科の目標

「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化について理解を深め、豊かな情操を養う。」P6

「美術の基礎的な能力を伸ばし」について

・今回の改訂では、「生きる力」をはぐくむための学力の重要な要素として、基礎的・基本的な知識・技能の習得、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等や、学習意欲の向上が求められている。「美術の基礎的な能力は」は、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等を含むものであり、その育成には、生徒の主体的な学習活動の中でこれらの能力が関連しながら、十分かつ有効に働くようにすることが重要である。P9

解説

以上は平成 20 年度改訂中学校学習指導要領解説 美術編 美術科の目標文中にある「美術の基礎的な能力を伸ばし」についての詳細文である。「生きる力」とは、外界の事象から自分の価値判断に必要な情報を入力（取材）し再構成の後、他者へ出力するプロセスを円滑に遂行するための能力を示しているが、このプロセスに位置する“再構成”という手続きの中に、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等が含まれていると読み解くことができる。

学年の目標 学年の系統性 各学年の目標

第 1 学年

(2) 表現に関する目標

「表現の能力とは、具体的には、発想や構想の能力と創造的な技能であり、目標の(2)は、この二つから構成している。各学年とも目標の前半部分は、対象を見つめ感じ取る力や想像力を高め、豊かに発想し構想する能力や形や色彩などによる表現の技能を身に付け、意図に応じて創意工夫し美しく表現する能力を育てる」P12

解説

第1学年では、特に表現及び鑑賞の基礎となる資質や能力の定着を図ることを重視する。「対象を見つめ感じ取る力」とは先入観を持たず自身の眼前に起きている事象を歪みなく捉える力を示している。この力を育むためには、日々の生活の中で洞察に満ちた対象との関わりが前提になる。

「後半部分は、発想や構想を基に創意工夫し美しく表現する技能に関するものである。表現の能力は、これらの発想や構想の能力と創造的な技能とが相互に関連しながら育成されていくことになる。そのため、創造的な技能を働かせて実際に形にしていく中で発想や構想を再度見直したり、構想を練る中で新たな表現方法を考えるなど、相互に関連を図りながら高めていくことが重要である。」P12

解説

表現の能力を示す「創造的な技能」は、各学年においてカリキュラムの前半に位置づけられている。物質(絵具・道具等)を取り扱う領域である美術はその性質上、リテラシー教育という側面の中で、物質の性質を知り道具の適切な使用方法を学ぶ。そして後半部分で発想や構想との相互関係の中で作品を構築していく。

第2節美術科の内容

1 内容構成

「A表現」は三つの項目を設け、(1)及び(2)は発想や構想の能力に関する項目、(3)創造的な技能に関する項目とした。

- ① 絵や彫刻による表現(主題を生み出す・自分の表したいことを重視)
- ② デザインや工芸による表現(伝えること・使うこと)

P13

解説

※(3)創造的な技能に関する項目を(3)として独立させたことにより、生徒の実態に合った多様な題材にも一層柔軟に取り組めるようになる。

(1)及び(2)は表現の主題を生み出し、その主題を他者に伝えるという表現が表現として自律するための内容構成として設定されている。そして、(3)の創造的な技能に関する項目を融合的に(1)、(2)にフィードバックさせながら充実した表現の姿に近づくこと

で、質の高い表現の実現に近づくことができる。

- (1) 「感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する」

感じ取ったことや考えたことなどを自分の感覚で自由に表現する活動は、自己を確認したり、新たな自分を発見したりすることでもある。特に、自己の内面を見つめ、価値観を構築していく思春期の中学生にとって重要な学習である。P17

解説

他者性(社会性)を構築していく上で、自己の内面性へ向かってゆく活動はこの時期の生徒には抵抗あるものだが、自画像デッサンなどで自分を描き出す為には自己を見つめ、さらにその在り方に向き合う貴重な時間となる。

「感じ取ったことや考えたこと」

受け身ではなく、意識を働かせて何かを得ようとする能動的なかわりを意図している。同時に、自分の感覚を大切にしておいて対象から価値などを創出することを意味している P18

解説

自己の感覚が固有で唯一無二のものと感じ取った時、そこに自信と責任が芽生える。結果的に自分から関わろうとする態度が誘発される。

「発想や構想に関する次の事項を指導する」

ここでの学習では自己の感覚で形や色彩、材料などを豊かにとらえ、それを意図に応じ効果的に活かす能力が求められる。したがって、形や色彩、材料などを、固定的な概念でとらえるのではなく、目や心で実感をもって豊かにとらえ理解していくような指導が必要になる P18

解説

本来、固定的な概念を解体するために教育は存在している。それゆえ授業の中で指導者と生徒との間で取り持つコミュニケーションの質によって、固定的な概念は解体されていく事になる。

ア「感じ取ったことや考えたことなどを基に主題を生み出すこと」

アは(1)の学習を進める上で中心となるものであり、発想や構想を高める重要な事項である。P18

解説

固定概念が取り払われた眼差しは自身の感性にダイレクトに感応し、躊躇なく自身の表現したい主題を引き出す力を発揮する。

例えば、単に「校舎を描こう」といった題材の場合、生徒は、自分が描く絵が本物に似ているかどうかだけに価値が偏ってしまうことが多い。見たまま描くことも一つの表現であるが、表現したい主題がなく、そっくりに描くことのみを求めるのであれば美術の表現活動のねらいとしては十分とはいえない。P18

解説

“本物に似ている” “見たまま描く” “そっくりに描く”

このような、考え方は評価と密接に関わる極めてデリケートな問題であり、むしろ指導者が上記の要素を過大に評価している傾向も否定することはできない。その為、教育要領の中でも「単に描く作業」として取り上げて指導者の評価の偏りを警戒している。

デッサンというものは、モチーフ（対象物）の在るべき姿を理解し、その構造を二次元の中で再構成する作業である。局面的に上記のようなネガティブな作業も含まれることは避けられないが、むしろ“本物に似ている” “見たまま” “そっくり” とはいったいどういう概念なのか一つの単元で掘り下げる価値すらあるのではないだろうか。

イ「主題などを基に表現の構想を練ること」

ここでは表したい主題をどのように表現するのかという考えを組み立てるなどの構想の能力を高めることをねらいにしている

構想の能力を育成するためには、主題を基に「全体と部分との関係などを考える」、「単純化や省略、強調する」などの構想を練る為の具体的な手立てを身につける必要がある P19

解説

主題を明確にするためには主題の中の優先順位を設定する必要がある。まず全体のビジョンをイメージしつつ、その全体を形作っている部分一つ一つの価値を決定していく。

(3)「発想や構想したことなどを基に表現する活動を通して、技能に関する次の事項を指導する。」

- ・表現の学習では、発想や構想の能力と創造的な技能が調和良く働くことによって生徒の創造性や個性が豊かに発揮された作品がつくられる。
- ・表現の学習は、表したいことを基に、思考・判断し、表現する創造的な課題解決の学習そのものである。
- ・表現の学習の充実を図るためには、生徒に自らがよりよい価値を求め、感性や想像力を働かせて、表現したい内容をどのように表すかという発想や構想の能力と、それを表現する技能を調和よく育成することが求められる。P20

解説

デッサンを実践する上で、どのように主題を思考し、決定した主題を画面の中で具体化するためのエスキース（自身の構想を確認する作業）を通過し、リアルスケール画面で表す。という流れの中で展開するが、(3)「発想や構想したことなどを基に表現する活動を通して、技能に関する次の事項を指導する。」はデッサンにおいても要素は押さえているが、指導者の経験値によって認識に差異が生まれることは考えられる。

【共通事項】

平成20年から新たに加えられた【共通事項】は「A表現」及び「B鑑賞」の学習において、共通に必要な資質や能力であり、それのみを取り上げて題材にするのではなく、「A表現」及び「B鑑賞」の、それぞれの学習を通して指導するものである。また【共通事項】の視点から発想や構想を促したり、生じたイメージを大切に鑑賞したりすることにより、感性や美術の創造活動の基礎的な能力が一層豊かに育成されていくことになる。

解説

デッサン教育の中で表現と鑑賞の学習において共通に必要な資質や能力を考えると、モチーフ（対象物）とモチーフに対峙する自身と画面の三者関係をイメージすることができる。共通事項を設定するまでの指導要領の中ではA表現において、暗にここで指摘している三者関係を匂わせている部分があったが、共通事項を導入することで三者関係を具体的に示すことができるようになった。つまり、“自身が描いている画面を鑑賞する”という状態を十分認識するということである。

共通事項

ア 形や色彩、材料、光などの性質やそれらがもたらす感情を理解すること。

イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

アは形や色彩、材料、光など、それぞれの要素に視点を当て、温かさや柔らかさ、安らぎなどの性質や感情を自分の感じ方を大切に理解する内容である。それに対して、イは、対象の全体的なイメージを大きくとらえる内容である。いわばアは「木を見る」、イは「森を見る」といった視点で生徒が造形を豊かに捉え、表現や鑑賞の学習の基盤となる感性や造形感覚などを高めていくことをねらいとしている。P26

解説

ここで示す共通事項の中の二つの側面（ア・イ）はそれぞれ微視的・巨視的視座を表している。デッサン教育において、まず対象の形態・固有色のリズム観・素材感・対象を照

らし出している光などあらゆる微視的様態から主題に結びつく情報を引き出す。次の段階で対象が巨視的世界観の中で、どのような関係性を持ちながら対象を取り巻く環境に存在しているのかを読み解いていく。

『形や色彩，材料，光などの性質や，それらがもたらす感情を理解すること』

「性質」とは，その事物に本来備わっている特徴のことであり，色の明るさや暗さ，材料の硬さや軟らかさなど，感覚で直接感じ取るものである。P26

解説

「性質」についての記述だが，とりわけ重要と思われる要素は光の存在である。直接手で触れる以外には，光の存在なしに対象を認知することはできない。ここでいう「性質」とは，光によって照らし出された色彩・質感という自明の現象を生徒が自覚的に認知するために，いかなる指導が必要かを思考することが大切である。

「理解する」とは，単に知識として理解するのではなく，知識なども活用しながら，生徒が自分の感じ方で色彩などをとらえ，自分としての考えをもつことである。P26

解説

リアルタイムで自分が出遭った情報を既知の“知識”あるいは“観念”というフィルターで濾すことによって対象を認知し，再度上書きされていない出会いの瞬間に得られた感覚や，感動の確信性を高めることで質の高い“理解”が実現する。

例えば，見る角度や遠近の関係により形の見え方が異なり，円が楕円に，長方形が台形に見えることや，錯覚など人間の視覚の特性などにも気付かせることが大切である。美的感覚は単に感覚のみでなく，知的な構成力によっても支えられており，それらの知識などが背景となって形を一層豊かにとらえ，広く理解できるようになるものである。P27

解説

線遠近法，それは中世の教会壁画空間の中でどこまでも続くような永遠の奥行のある世界観を求める欲求から生まれ，疑似的な3次元空間を平坦な壁面へ，いかに表現しうるかという模索から発明されたものである。デッサン教育において線遠近法の教授に触れる際，その歴史的背景つまり現実の人間社会に密接に繋がっている実感を，生徒に十分伝えることで生徒が自分も社会の中の一人であり，同時に唯一無二の絶対的な存在でもあるという認識に立って対象を捉えることになる。

第3章 各学年の目標及び内容

第1節 第1学年の目標と内容

目標

(2)「対象を見つめ感じ取る力や想像力を高め、豊かに発想し構想する能力や形や色彩などによる表現の技能を身に付け、意図に応じて創意工夫し美しく表現する能力を育てる。」

P31

発想や構想は、まず始めにあつて、それに従って表現していく過程で表しながら考え、思考錯誤しつつ発想や構想を見直したり修正を加えたりして、更によいものへと創意工夫をしながら循環的に高まって行くことが必要である。P32

美術の創造とは、このように手や体を使って考えながら表し、表しながら考える循環的・発展的学習過程の中で、よりよいものとして具体化していくことを大切にこそ育つものである。P32

解説

デッサン教育の中で“訂正”や“修正”という局面は、有意義な教育的可能性を秘めている。人間が対象物を“見ること”はとても不安定であり、かつ不十分な行為である。そしてこの無防備な行為の中に、生徒自身の本質的な課題が浮き彫りにされる。

自明のことであるが“見ること”の成立の前提として眼（視覚）を物理的に支える頭部さらには、上腿・下腿の存在を無視することはできない。つまり、描く姿勢について言及する必要性もある。

まとめ

平成20年度改訂中学校学習指導要領解説美術編中のデッサン教育つまり基礎教育にしばり込んで考察してきたが、その要素はジョン・デューイの経験論の生活経験からの気付きや、行為の中で起こる問題に対する適切で、主体的な行動などの指摘とみごとに符合している。

“再構成”という概念は“対象を見つめ感じ取る力”（先入観を持たず自身の眼前に起きている事象を歪みなく捉える力）に呼応し、主体性を引き出すためには“固定概念を取り払い自身の感性にダイレクトに感応し、躊躇なく自身の表現したい主題を引き出す力”が機能する。本稿の中で「生きる力」を“外界の事象から自分の価値判断で必要な情報を入力（取材）し再構成の後、他者へ出力するプロセスを円滑に遂行するための能力”と定義したが、まさにデッサン教育の中では「リアルタイムに自分が出遭った情報を既知の“知識”あるいは“観念”というフィルターで濾すことによって対象を認知し、再度上書きされていない出会いの瞬間に得られた感覚や感動の確信性を高めることで質の高い“理解”が実現する。」と“学びのかたち”をこのような“理解”として捉えている。さらに改訂後、

新たに加えられた【共通事項】を積極的に読み解くことで“自身が描いている画面を鑑賞する”という三者関係（モチーフを見つめる自身・描く自身・描いた自分の画面を見る自身）を具体的にイメージすることができるようになった。このような手続きによって、デッサン教育の中で展開される“訂正”や“修正”という局面は単に，“直す”行為ではなく十分有意義な教育的可能性を秘めている活動と思われる。

主要参考文献

- ・ 中学校学習指導要領解説 美術編 文部科学省 日本文教出版株式会社